

【 2 】

氏名	上田 閑照 うえだ けいすけ
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第104号
学位授与の日付	昭和51年5月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	神秘主義研究

論文調査委員 (主査) 教授 武内義範 教授 武藤一雄 教授 辻村公一

論文内容の要旨

本論文は上下二篇に分れ、上巻では「禅の立場と神秘主義」が考察せられ、下巻では「マイスター・エックハルトの神秘主義」が問題とされている。上田氏はこれによって、禅の精神がその核心のところで親近性をもつとされている、エックハルトの神秘思想を取り上げて、両者の比較研究を行おうとする。しかし本論に関する限りその力点は、むしろ禅の特質を、現代の人間の自覚の問題に結び合せ、これを東西思想の出会いの場に於いて明らかにすることにあるらしく思われる。

この点がもっともはっきり出ているのが上巻第一章・第二章・第三章で、いま一括してその要点を述べると、上田氏はまず禅の問答の範例として趙州の「庭前の柏樹子」を把えて、禅体験の解明に着手する。周知の如く、これは「如何なるか是れ祖師西来意」という或僧の間に答えたものであるが、上田氏はこの問を西欧中世神学の *Gur deus homo?* という問と対比させる。エックハルトのそれに対する答は神の存在と働きは「何故なし」である、というのである。上田氏は上巻でも下巻でもエックハルトの「何故なし」ということの含蓄を、種々の相にわたって見事に解明している。そしてここでは又同じく神秘主義の詩人アンゲルス・ジレジウスの「薔薇は何故なしに咲く」という詩にも関連させて、この「何故なし」の深まり行く過程を追求して行く。それは先ず、「何故に」が否定される——つまり目的や意味の領域が排棄せられ、主客や神人の対立が支配する世界が克服される——宗教的意識のたかまりが、次第に「庭前の柏樹子」の自覚に近づいて行く道程の綿密な省察である。しかしそれに至り着くためには、「何故なし」の立場は、さらにもう一の関門を通過しなければならない。というのは「何故なし」を言う立場は、一切の理由づけを否定しながらも、なお否定的な理由づけの痕跡を残しているからである。端的な「薔薇の花」が「庭前の柏樹子」に一層親しいであろう。この場合「薔薇は神からも見られず、人間からも見られず、蓋天蓋地表裏なき全き一枚である」と上田氏は述べている。しかしこの境地にまでは、西欧の神秘主義はまだ到達していない、というのが論者の主張である。

「庭前の柏樹子」は祖師西来意を問う僧の对象的な物の見方、問の立て方を、一挙に否定する。そして

彼をも問の渦流にまきこんでしまう蓋天蓋地の大疑団を、そのところに現成せしめる。しかもこの大疑団の黒漫々の世界は、それ自らによって互解して、大悟徹底を成立せしめる。その時沈黙の底から新しく言葉が誕生する。論者はこのような言葉を根源語と名づけ、禅経験の核心である「絶後再蘇」を「言葉から出て言葉へ」と定式化する。「香巖撃竹」の場合のように、このような宗教的主体の覚醒には、いつも閃光の如き主体の外からの超越的な働きが必要である。それは所謂「啐啄同時」に働く。この時、主体の側で沈黙が破れ、初発の言葉、言葉なき言葉、沈黙の言葉が生れる。それは呵々大笑であったり「喝！」の一声であったりする。それらはすべて根源語の一の姿相である。根源語はさらに発展して人と人との問答になる。このことを原型として、上田氏は言葉が人間存在の根底であり、そこに於いての根源的出来事であることを論究している。

下巻に於いては、上田氏はエックハルトの神秘主義を「神と人間との一」「突破の思想」「真人」の面から、相互の緊密な構造的連関に従って論じている。この巻は上巻の概観的な叙述とは異って、頗る密度の高いものとなっている。氏はエックハルトに対する、近來の文献批判の成果に留意し、自らもエックハルトの用語法を審かに斟酌して、正確で明晰な解釈と、一貫した論旨によって叙述をすすめる。こうして従來の神秘主義とことなるエックハルトの特色が、遺憾なく発揮せられ、かつてオッターが「上に向つ開かれた神秘主義」と名づけて、その禅との類似性を指摘したエックハルトの深義が見事に解明されている。

論文審査の結果の要旨

エックハルトと禅との内的関連をみとめたのは、R・オッターやF・ハイラーであったが、中国・日本で発展した禅については、立ち入った考察を行わなかった。近時、禅が西欧人の注目をあつめるようになってからは、多くの宗教学者が禅に関心をむけるようになったが、主としてヨーガなどとの関係を指摘するに留って、未だ禅の固有の立場を宗教学乃至宗教哲学の立場から本格的に考察したものはない。論者は西洋神秘主義、とくにエックハルトに多年の研鑽をつみ、また禅についても多年に亘って実修と研究を重ねて来た。その結果がエックハルトを媒介にして、禅の深義を開き示す、この特色のある業績となったのである。

上田氏の論旨は深遠であるが、その叙述は明晰であって、宗教学乃至宗教哲学からする禅へのアプローチとしては、劃期的な意義を有するものである。ただその論理の平明さは禅の不立文字の玄旨が、このように解明されて了って、果してよいものであろうか、との疑をいだかせるかもしれない。しかし学としての宗教学の立場からは、それぞれの宗教の本質や構造が出来るだけ客観的論理的に解明されることが、先ず何よりも望ましいのであって、氏の業績は現代の学界の要請にこたえる貢献であると言わねばならない。

この論文は上巻と下巻とでは、その方法をことにしている。これも禅については一般的研究が緊要であり、他方エックハルトについては、西欧学界の緻密な研究を十分に考慮しなければならない以上、この程度のインテンシヴな研究が是非とも必要とされたのであろう。それはそれで時宜をえたものである。しかし禅についても、他日エックハルトの場合と同様の密度の高い業績を示し、かつてR・オッターがエックハルトとシャンカラについて行ったような高度に学問的労作を完成されることが望まれる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。